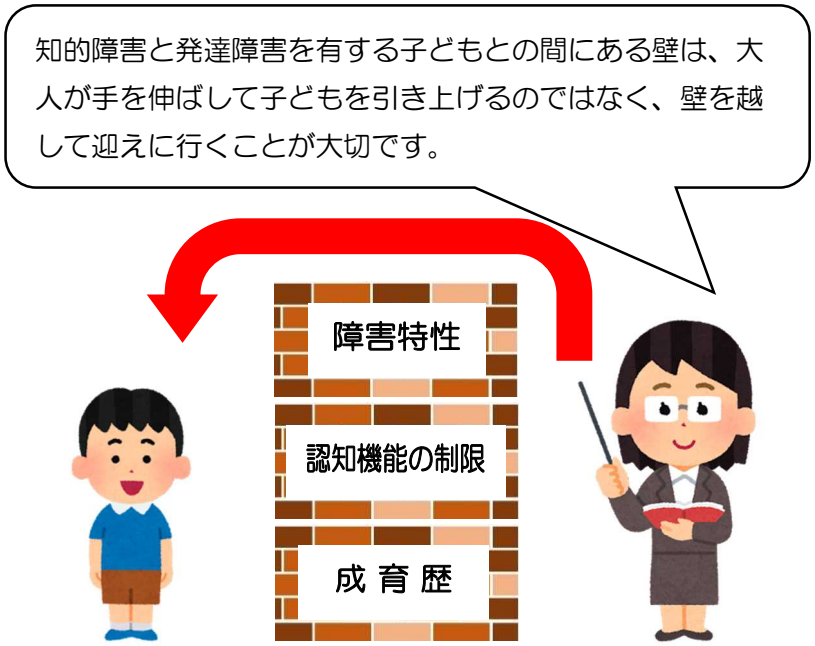
大府もちのき特別支援学校　相談支援部
2023年１１月　　No．３

自立活動だより

障害児等療育支援事業　夏季研修　（2023.8.7）

日本福祉大学の中嶋理香先生に「子ども達のことばとコミュニケーションを育む」という題目でご講義いただきました。

講義より
○「コミュニケーション」については、子どもの発達段階や対人意識が関係している。
○発達期ごとにコミュニケーション発達の特徴がある。
○知的障害＋発達障害の子どものハードル
・感覚的コミュニケーションが成立しにくい。
・他者の存在を安心感の中で認められない。
などのお話があり、今後に生かせる有意義な研修会になりました。



コミュニケーション上の壁

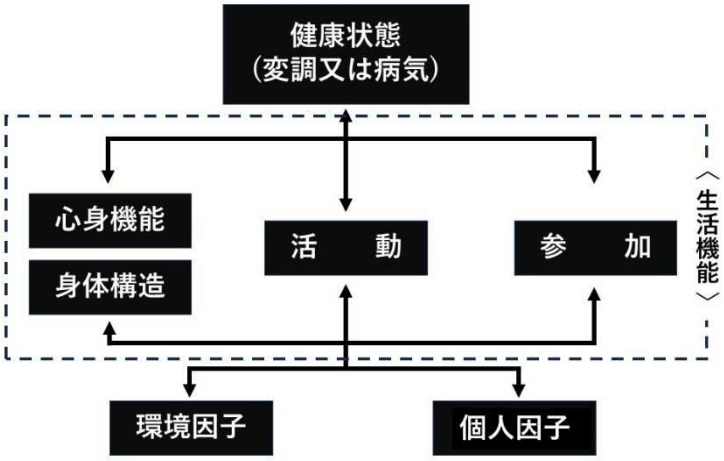
テーマ　障害の捉え方と自立活動について

ＩＣＦとは

特別支援学校教育要領・学習指導要領解説「自立活動編」に障害の捉え方の変化について書かれています。

ＩＣＦ(国際生活機能分類)とは、「International Classification of Functioning, Disability and Health」の略称です。

ＩＣＦでは、人間の生活機能は「心身機能・身体構造」、「活動」、「参加」の三つの要素で構成されています。それらの生活機能に支障がある状態を「障害」と捉えています。そして、生活機能と障害の状態は、健康状態や環境因子等と相互に影響し合うものと説明され、構成要素間の相互関係については、右の図のように示されています。



＜図　ICF の構成要素間の相互作用＞

自立活動との関連

自立活動の目標
個々の児童又は生徒が自立を目指し、**障害による学習上又は生活上の困難**を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う。

学習指導要領には、次のように示されています。

「障害による学習上又は生活上の困難」を、どのようにとらえますか？

ICF の考え方を踏まえるということは、障害による学習上又は生活上の困難を的確にとらえるとともに、幼児児童生徒が現在行っていることや、指導をすればできること、環境を整えればできることなどに一層目を向けるようになることを意味していると言えよう。

「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編」より

留意点：成長期における幼児児童生徒の実態は様々に変化するので、それを見極めながら環境を整理したり整えたりする必要があります。ねらいにつながるように実態に応じて環境を整えつつ指導内容・方法の創意工夫に努めましょう。

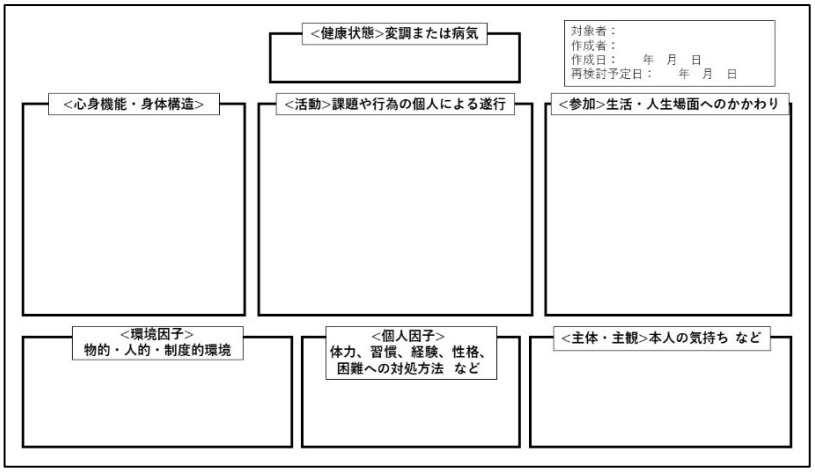
活用例：「ＩＣＦ関連図ワークシートを用いた個別の指導計画の検討」

ＩＣＦ関連図を活用する利点

◆関係者それぞれが持っている情報をＩＣＦという共通の視点で共有することで、関係者間の共通理解が促される。

◆生活機能に加え、環境因子や個人因子を含めた幅広い視点から子どものことを検討することを可能にする。

◆情報を集約した図を使用することにより、子どもの全体像を捉えた話し合いができる。



<例：ICF 関連図ワークシート>

ICF の多面的・総合的な視点は、子どもの理解と支援を考えるヒントになります。

参考文献：文部科学省 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編
ジアース教育新社　独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 編著　「特別支援教育における ICF 活用 Part3 学びのニーズに応える確かな実践のために」
ジアース教育新社　独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 編著　「ICF 及び ICF－CY の活用 試みから実践へ―特別支援教育を中心に―」